

## 絵本に表れる作者の思想

『ぐりとぐら』をめぐって

武田 京子

(岩手大学 教育学部)

### 1. はじめに

絵本には、テキスト(文章)・イラスト(絵)の作者、編集者、読み手等の複数のおとながかかわり、聞き手の子どもへたくさんのメッセージが伝達される。1963年発行以来、子ども達に絶大な支持を受けている『ぐりとぐら』のシリーズを取り上げ、そこに表れている作者の思想を分析する。

### 2. 研究の方法

中川李枝子・山脇百合子による、絵本『ぐりとぐら』(1963)、『ぐりとぐらのおきゃくさま』(1966)、『ぐりとぐらのかいすいよく』(1976)、『ぐりとぐらのえんそく』(1979)、『ぐりとぐらとくるりくら』(1987)、『ぐりとぐらとすみれちゃん』(2000)、『ぐりとぐらのおおそうじ』(2002)を分析の対象とし、作者及び編集者、読み手の意識分析のてがかりとして『ぼくらのなまえはぐりとぐら』を用いた。

### 3. 結果及び考察

#### (1) 各作品について

##### ①『ぐりとぐら』

母の友に掲載された幼年童話『たまご』を絵本編集者松居直は、場面わりを行い絵本にした。どんぐりやくりを拾う目的で森の奥に出かけたぐりとぐらは、大きな卵を見つけ、家から運んだ道具でカステラを作り、森の動物達にご馳走した。残った大きなたまごのからで自動車を作った。

##### ②『ぐりとぐらのおきゃくさま』

唯一、縦長の絵本。雪合戦をしていたぐりとぐらは、雪の上に大きな足跡を見つけ、たどっていくと自分達の家に着いていた。家の中には誰かがいる気配がしており、そのうちカステラの焼ける匂いがし

てくる。サンタクロースがクリスマスのプレゼントとしてケーキを焼いてくれたのだった。その晩、友達動物達と一緒にケーキを食べる。

##### ③『ぐりとぐらのかいすいよく』

海辺で遊んでいたぐりとぐらは、うみぼうずからの手紙が入ったビンを見つける。うみぼうずのために灯台の真珠を探してあげた二人は、お返しに水泳をおしえてもらう。

##### ④『ぐりとぐらのえんそく』

遠足に出かけたぐりとぐらは、お弁当を食べようとするがなかなかお昼にならない。体操やマラソンをするうち茂みの中にほつれた毛糸を発見し、たどっていくと一軒の家にとどり着き、畑で木苺を植えているくまを発見する。毛糸はくまのチョッキがほつれたものだった。くまを誘って野原でマラソンをしているうちにお昼になり、一緒にお弁当を食べる。

##### ⑤『ぐりとぐらとくるりくら』

あさごはんをはらっぱで食べようとしていたぐりとぐらは、手の長いうさぎのくるりくらと出会う。一緒にあさごはんを食べたあと木登りを教えてもらったり、雲のボートに乗せてもらう。おかあさんうさぎに手を振っていると、ボートはひっくり返りそうになる。熊手でおかあさんが引き寄せてくれ、無事着陸し10時のおやつを食べる。お母さんは3人に縄跳びを編んでくれる。縄跳びをしながら丘を下り、かごを持って家に帰る。

##### ⑥『ぐりとぐらとすみれちゃん』

朝起きてすぐに畑仕事をするぐりとぐら。にんじんの葉っぱの入ったオムレツを食べ、今度はかぼちゃを植えようと話し合う。ぐりは栽培方法を、ぐらは調理方法を調べていると、すみれちゃんがかぼちゃをかついでたずねてくる。大きくてなかなか切れ

表:『ぐりとぐら』シリーズの構成要素

タイトル	初出	単行本化	ストーリーの発端	面白さの中心	大人の存在	食べ物	友人
ぐりとぐら	1963	1967	大きなたまご	発見・工夫・共食・工夫	—	カステラ	森の動物達
ぐりとぐらのおきゃくさま	1966	1967	大きな足跡	発見・追跡・謎解き・共食	サンタクロース	クリスマスケーキ	森のともだち
ぐりとぐらのかいすいよく	1976	1977	手紙・真珠	発見・救済・泳ぎの取得	うみぼうず	—	—
ぐりとぐらのえんそく	1979	1983	ほつれた毛糸	発見・追跡・謎解き・共食	—	お弁当	—
ぐりとぐらとくるりくら	1987	1992	手の長いうさぎ	出会い・新しい遊び・共食	うさぎの母親	朝食・10時のおやつ	—
ぐりとぐらとすみれちゃん	2000	2003	かぼちゃ	畑仕事・新しい知識・共食・期待	女の子	かぼちゃ料理	森の動物達
ぐりとぐらのおおそうじ	1997	2002	ほこり	工夫・共食	—	ニンジンクッキー	うさぎのぎつくと仲間

ないかぼちやをすみれちゃんは、高く放り投げて落として割ることを教えてくれる。空に上がったかぼちやに気づいた動物達がやってきてみんなでかぼちや料理を食べる。夕方すみれちゃんが帰ってからぐりとぐらはかぼちやの種を土に埋める。

#### ⑦「ぐりとぐらのおおそうじ」

⑥までとは異なり、こどものともからの単行本化ではない。

春の朝、気がつくとも部屋の中は冬の間にたまった埃でいっぱい。大掃除を始めるが、掃除道具がぼろぼろなので、自分達が雑巾やほうき・はたきになって掃除をする。窓の外からのぞいたウサギのぎつくは、びっくりして友達を呼んでくる。ぐりとぐらは、家の中がきれいになったのを友達に見せ、にんじんクッキーでおやつにする。

### (2) ストーリーの構成要素からみた作者の思想

#### ①双子の兄弟

青い服を着ているのがぐり、赤い服を着ているのがぐらである。中川は、自分自身のきょうだい経験から、対等なきょうだい関係として双子にあこがれていた。年長者と年少者の間には、お互いに遠慮や優越感などの気持ちの行き違いがあり、周囲からの接し方にも差異があることが多い。理想のきょうだい関係として双子の主人公を設定したと考えられる。読者の子どもにとっても、自分自身を片方に投影すると同時に、片方を自分の一番近い友達として見ることを可能にしている。

#### ②子どもの理想的な生活スタイル

外見はのねずみであるが、子どもそのものを描いたものである。早起きで、午前中はエネルギーに遊び、食欲旺盛である。自分の興味関心をいろいろに広げ、試している。

#### ③身近なところに冒険や発見がある。

卵、足跡、ビンに入った手紙、ほつれた毛糸などをきっかけにストーリーが展開していく。

#### ④友だちの存在

カステラ・ケーキ・クッキーなど分け合って食べる友だちの存在があり、分け合って食べることによって新たな友達ができる(『ぐりとぐらのえんそく』のくま、くるりくら)。うみぼうずからは「親切な友達」と呼びかけられ、始めは自分達のこととは受け取っていないが、困っていることの解決を手伝い、自分達のしたことに満足し、遠くにいる友達への思いをかけることを経験する。子どもにも年齢にと

らわれない友だち関係があり、対等な助け合える人間関係が存在することを教えてくれる。

#### ⑤おとなの役割

サンタクロース、うみぼうず、くるりくらのおかあさんが登場する数少ないおとなの存在である。うみぼうずは、④で述べたようにおとなではあるが友だちとして登場している。サンタクロースはお客様としてぐりとぐらは認識しているが、子どもにプレゼントを運んでくるサンタクロースで、カステラ好きのふたりに飛び切り上等なものを家で焼いてくれるというプレゼントをする。くるりくらのお母さんは、危険なときに救援の手を差し伸べ、「運動は大切」と、子どもの行為を認め、適切な遊び道具を与えてくれる。このようにおとなたちは、子どもにとって信頼できる・見守ってくれる・よきアドバイスをしてくれる存在として描かれている。

すみれちゃんは女の子として登場するが、かぼちやに関心を持つぐりとぐらに、かぼちやの種類や料理方法を教え、食べた後の種をまくことに気づかせてくれる。うみぼうずとは反対に、子どもであつてもぐりとぐらにとっては、指導者的立場を取っている。

#### ⑥絶対的平等感

年齢差と同時に、性差による差別も見られない。料理や掃除など従来女性の仕事とされていたことを、サンタクロースやぐりとぐらは、積極的に取り組んでいる。自分達が好きなことを行ない、そのことが他の人にも喜んでもらえることに重きをおいている。

### 4. まとめ

保母(保育士)であった中川は、「子どもの楽しむこと＝食べること」ととらえ、子ども達の大好きだった「ちびくろサンボ」のホットケーキに対抗してカステラを登場させた。子どもをよく知っているため、子どものエネルギーが発揮できる午前中にストーリーを展開している。

約40年間に7冊となった、このシリーズは、計画的に作られたものではない。1冊ごとに完結した作品として、作者は全精力を投入して製作を行なっている。複数の世代に受け継がれ支持されている理由は、作品が子どもの本質をとらえ、子どもとの良い関係が保たれているからといえる。

#### 参考文献

福音館書店母の友編集部編『ぼくらのなまえはぐりとぐら』絵本「ぐりとぐら」のすべて(2001)